

# 図書館通信 — 27 —

1974. 7

## フランスの大学と“権力”

篠田 知和基

昨年の秋、フランス政府の特別の招きによって、パリ第八大学、通称、ヴァンセンヌ大学に留学した。

ヴァンセンヌといえば、パリ東端の一大森林公園で、大革命時代、牢獄になっていたその城にサド侯爵も幽閉されていた。

ここに大学ができたのは1968年の9月で、はじめ新しい大学のための実験センターとして発足した。昨年でちょうど5年である。

これは、1968年のいわゆる5月革命の結果として出来た、学生参加と大巾な自治を主眼とした大学で、その後、パリ大学が細分化されるにともなってパリ第8大学となった。発足当時は、新進気鋭の作家・詩人や、そのころのソルボンヌの講壇文学に反抗して国外に追われていた優秀な批評家などをそろえて、世界中の注目を集めたものだったが、それから5年たって、その新しい試みはどうなったのか、などと、議論のやかましいところだった。

これが出来た1968年といえば、前回の留学の間のことであり、5月革命のときは、まるで故郷のシャルヴィルを出奔してパリー・コミューンに駆せ参じたランボーのように、留学先のグルノーブルから上京して、オデオン座の革命討論会をのぞいてみたりもした。町では舗石が飛び交い、警官隊は、相手かまわず催涙弾を発射していた。バリケードの上では、私が敬愛していた作家、ジャン・ケロールが若者たちにつるしあげられているのを見た。彼にとってこの経験は深刻な衝撃を与えられたものだったらしく、その後の作風は驚くばかりの変化を見せていった。

グルノーブルに帰ってみると、学友たちが寮の地下室で、コーラの壺を集めては火炎壺を作ったり、町の地図を広げて、どこを占拠し、どこにバリケードをはるか、などと作戦を練っていた。革命の波は少し遅れて地方に広がったらしい。しかしそのうちには、政府の強力な弾圧と、それ以上に巧妙な融和策によって、改革ないし革命の情熱も尻すぼみになって、やがてそのまま、長い夏休みに入ってしまった。フランスでは、夏のあいだはすべての活動が停止し、商店も錠戸をおろしてしまう。革命もその例外ではなかったわけがグルノーブルの“革命家”たちも、手に手に火炎壺をさげて、ニースやカヌヌのコート・ダジュールにバカンスに出かけて、海や浜辺に火炎壺を放りなげれば、やり場のない思いを発散させて終った。

### も く じ

- フランスの大学と“権力”  
篠田知和基…………… 1
- 私のすすめたい本・25  
山の本  
大石 惇…………… 3
- 蔵書目録刊行について  
下村一夫…………… 4
- 静岡師範学校等  
関係資料目録…………… 5
- 教官著作寄贈図書一本館—  
その1…………… 2  
その2…………… 3
- 附属図書館委員会報告… 6
- 東部地区図書委員会報告  
…………… 6
- 附属図書館委員会  
構成委員  
昭和49年度…………… 6
- 人事異動…………… 6
- おしらせ…………… 6

そのときの政府の巧妙な大学政策のひとつがヴァンセンヌ実験センターの設置であり、それと平行して行われた各大学での上からの改革だった。それがどのような形に成長したかということへの興味とともに、かつてグルノーブルの寮の地下室で火炎壘を作っていた友人の一人が、その助教役になっていて、それに会うのと、それともちろん、現代の文学批評の新しい傾向を代表するJ：P・リシキール教授のセミナーに出るという名目で、ヴァンセンヌを再度の留学先に選んだわけだった。が、静大の都合で半年しか滞在できなかったせいもあるだろうが、それはまた、なんとという幻滅だったことだろう。

かつては、あれほど新しい世代の期待を集めて誕生した革命の結実が、これはまた、なんともみじめななれのはてのありさまだった。すべて学生の手にかかされている大学事務は、何度足をはこんでも、前のグルノーブル大学からの書類の移籍ひとつ満足にできなければ、ピラだらけの構内は荒れ放題で、便所の扉もなく、図書館には、信じられないほどわずかの蔵書しかない。かつて世間の注目を集めたスタッフたちも、その後、すっかり人事がストップしてセコハン化し、一方、新しい才能を迎えることもできず、学生不満は恒常化した紛争状態を作っていて、授業もほとんど行なわれなければ教師も教える情熱を失っているかのようであった。

それらすべての原因は、もちろん予算の不足であり、フランス政府は、あらゆる手だてを使ってこの新大学、学生の大学をつぶしにかかっているのだと、ピラは叫んでいた。

5月革命後5年、それが、すでに髪も半白になったヴァンセンヌ大学助教役の憂鬱にも現われていた。5年前には新しかった彼の理論もすでに古びた。思えば、それ以来、日本に帰って世界の学問の前衛とふれることのなかった私についても同じことが、それ以上に言えるわけだった。

かつてのソルボンヌも、大学改革によって新・ソルボンヌ、パリ・ソルボンヌ、ソルボンヌ・パリなどの小大学に分割されて、スタッフもひとり若がえったはずだったが、すでに5年の歳月を経てさっそうとした中堅も肉づきのいい大家に変貌し、昔と少しも変わりのない「権威」をふり回すようになっていた。

前回の留学中にド・ゴールに代わって大統領になっていたポンピドゥーもまた、すっかり老いて、その写真や似顔は、思わず前任者と錯覚させるほどになっていた。そのポンピドゥーが死んだのが、

帰国の予定の前々日ごろだったろうか、帰国する筈だった日が国葬の日になって、どこもかしこもが閉鎖され、警官があわただしく街を走り回った。5年前にも同じ警官たちが揺るぎかけた「権威」と「秩序」の維持のために目をひきつらせて走り回っていた。

フーシェの秘密警察以来、権力保護のために水ももらさぬ警戒網をはりめぐらせている市警、県警、そして、ヨーロッパの軍隊に属する憲兵隊、彼らがフランスにいるかぎり、ド・ゴールのいわゆる「専制民主主義」は揺るがない。5年前には深夜の町を一人で歩いていると、いきなり警官に自動小銃をつきつけられて、不審尋問をされることは珍らしくなかった。あるとき、オレンジを新聞紙に包んで小脇にかかえて歩いていると、その自動小銃で壁に後ろむきに押しつけられて、身体検査をされたこともあった。警官が不審に思っただけらしいのは、丸いかたまりがごろごろした新聞包みで、それを地面に下ろさせて、足でくばして検査をした。黄色いオレンジが溝にころがりだして、その場はけりになったが、理由もなく、不意に警棒でなぐられた友人もいた。

デモのときには装甲車だけではなく戦車も出た。5年前、パリに向かったときには、泊まったホテルの窓の下を、深夜、パリに向かって集結する戦車の響きで一晩中寝られなかった。そのような強大な警察権力は、また、命令、支配系統の確立によっても裏打ちされていた。それが大学改革を政府の思うとおりに押し進め、ヴァンセンヌを骨抜きにもしていたのだった。いやそれは、サド侯爵を幽閉したのと同じ、まさに鉄壁の牢獄だったのかもしれない。（教養部講師 フランス語）

## ■ 教官著作寄贈図書 一本 館一（その1）

中條 修 （教養部）

ことば・そして文学—生きた言語を考えよう  
Goodman, P. 著 中條修訳  
(紀伊国屋書店 1973)

上田伝明 （教養部）

インディアン憲法崩壊史研究  
(日本評論社 昭和49)

石塚経雄 （教養部）

ベルジャーエフ研究—実存的人格主義と弁証法的自己否定の倫理—  
(明玄書店 昭和49)

大石 惇 （農学部）

チューレン・ヒマール 静岡大学山岳会チューレン・ヒマール遠征隊編  
(静岡大学山岳部 昭和48)

## 山の本

大石 惇

山に登る行為それ自体は重力に逆らって身体を高い所へ引き上げる行為であるが、一人一人が異なった意志を持ち、一人一人がその行為に対して自分なりの意味づけをしているものである。「なぜ山に登るのか」と問われ、山に行く人々がそれぞれの言葉で答えて来たし、一方ではその間には黙して語らなかつた岳人も多い。語られた多くの言葉の中にも、自分の心境がびつたりくるものから、じっくりこないものまで様々である。それもその筈で登山行為に対する意味づけがそれぞれに異なるからである。言葉でも文章でも変るところはない。山の本には大体において、未知の世界に踏み込んだ生の、喜びと死と背中合せの恐怖が混じり合う時間の去来とを通してのその人なりの登山感や、感情が表現されており、その人のドラマがそこにあるが、それぞれに異なったひびきを読む人に与えるものがある。

そんなわけでここに紹介する本も多くの人々に感銘を与へるかどうかわざしとしても、今迄私が読んだ中で強い印象を受けたものの数冊である。

- ※1) モーリスエリゾグ著 近藤等訳 「処女峰アンナプルナ」 白水社  
 (2) マリオ・ファンティン編 牧野文子訳 「ヒマラヤ巨峰初登頂記」 あかね書房  
 ※3) ハインリッヒ・ハラー著 横川文雄訳 「白いクモ」 二見書房 (筑摩世界ノンフィクション全集21 1部所載)

これらはある山への闘いの記録である。

(1)は人類初の8000m峰登頂の記録で、この登頂こそ人類と自然の激しい闘いの中に生み出された結果であり、山とそこに行動する9名の人間の気持が実にうまく表現されている。(2)は世界にある8000m峰14座の初登頂記である。(1)と相通ずるところもあるが山により、時により、登る人達によりその苦闘も異なる。概略的で底は浅いがヒマラヤの8000m峰に向けた人類の歴史がその中にもり込まれている。(3)は世界三大北壁の一つといわれるアイガー北壁に挑み初登攀されるまでの壮絶な歴史である。

- (a) ヘルマン・ブール著 横川文雄訳 「八千メートルの上と下」 朋文堂 (世界山岳全集9巻)  
 (b) ジャン・コスト著 近藤等訳 「アルピニス

トの心」 朋文堂 (世界山岳全集5巻)

- (c) R・T・デュ・モンセル著 桑原武夫・高田方一郎訳 「われらのものならぬ世界」 筑摩書房

これらの本は山に対する心と思想を主な内容としているもので、(a)のブールは今でも各国の登山家の中でも知らない人はいない豪放果敢な登山家でも最も尖鋭な登山をした人として知られているが、人工登攀を極力排除し、人間のすべてをぶっつけての登攀に最大の喜びを感じていることがうかがえる。(b)はコストが山への強烈な想いを詩にたくしたものであり、(c)は自然への限りない愛情と登山行為から生まれた大きな喜びを語り、登山家に対し、自然への謙虚さ、登山とは何かを考えさせて呉れる。

最後に文学的な本、随筆の類として、

- (イ) 深田久弥著 「山の幸」  
 (ロ) 深田久弥著 「わが山々」  
 (ハ) 加藤泰安著 「森林・草原・氷河」 茗溪堂  
 (ニ) 武田久吉著 「登山と植物」 日本文芸社  
 などがある。 (農学部助手 種苗生産学)

※印は本館所蔵 その他の図書も購入予定

## ■ 教官著作寄贈図書 一本館一 (その2)

- 内藤 晃 (名誉教授)  
 日本原始古代文化の研究 (塙書房 昭和48)  
 市原寿文 (人文学部)  
 雄踏町誌 資料編5 雄踏町教育委員会・遠江考古学研究会編 (雄踏町 昭和48)  
 藤田 等 (人文学部)  
 嘉穂地方史 先史編 児島隆人・藤田等編著 (嘉穂地方史編纂委員会 昭和48)  
 細井淳一 (教育学部)  
 大谷誌 安本博編 (大谷誌編集委員会 昭和49)  
 遠江国横須賀城址調査報告書 安本博編 (大須賀町教育委員会 昭和49)  
 小和田哲男 (教育学部)  
 北條氏邦文書集 (近藤出版社 昭和46)  
 浅井氏三代文書集 一江州小谷城主一 (浅井家顕彰会 昭和47)

## 蔵書目録刊行について

下村 一夫

このたび初めて、本館は「静岡大学附属図書館蔵書目録 昭和46年度」（但し、浜松分館・農学部分館〔当時〕蔵書分を除く）を刊行しました。そこで、この目録の意義と編集内容について若干触れてみることにしました。

### I 刊行の意義と課題

この目録刊行の意義は、序文で「この（々大学附属図書館）忘れられ埋蔵されようとしている文化資源の利用開発」にあると述べていることに尽きます。現在、大学の図書館システムは集中制を採っています。この集中制の利点の一つに、図書資料が統一的に収集され、一元的体系の下に把握されることにあります。しかしながら、必ずしも資料検索面でこの点が十分に活用されているとは言えません。そこで、図書資料利用を促進する方策の一端として、蔵書目録の刊行を計画しました。カード目録が図書館での利用者だけに供されるのに対し、冊子体目録はコンパクトな形態で携帯にも便利であることから、図書館外で多数の人々の利用が可能です。だから、この目録を各研究室に備えて置けば、その場所で図書資料の把握と検索が容易となります。また、これが購入済図書資料の必要以上に重複するのを防ぎ、図書購入費の能率的利用が可能となると考えられます。岡山大学の蔵書目録第7巻の序の中で、目録が刊行されてきたことによって「……学術文献の相互利用が促進され、図書類の重複購入が漸減する傾向を示してきました」とあるように、利用方法によってはその点での有効性を発揮できるものと思います。この目録が一年度の蔵書の収載だけですので一冊だけでは効果的な利用は期待できません。それ故、毎年継続して刊行することによって、蔵書を累積し、収録範囲を広げていくことが必要です。それがより有効な利用を齎らすこととなります。また、逐年毎に累積されていく図書はこれら目録によってカバーされますが、目録刊行年度以前の図書や旧制静岡高等学校蔵書、供用換えされた西部分室・農学部分館蔵書は掌握できないので、これらについても目録を刊行する用意があります。これを処理するのに難点となるのは、経費と時間と労力の問題です。それらを解決したとき、利用者への

図書資料検索手段の提供が万全となると思います。図書と利用者の接近を図ることは、この目録一つでできるものではありませんが、少なくとも解決の端緒となるものであると思います。目録をいかに活用し、利用内容を高めていくかという課題は、それを支持する条件が整備できるか否かにあります。

### II 編集内容と問題点

蔵書目録の形態は、カード利用方式のオフセット印刷で、本文は分類順排列、巻末に和漢書は書名索引、洋書は著者名索引を付したものです。この形式は、時間と労力の制約、作業の比較的容易なもの、目録として一定の諸条件を備えたもの、を考慮した上で選択しました。図書内容はできるだけ詳細に記述し、逐次刊行物については、和漢書は「和雑誌目録」に委ね、洋書は重複することを承知の上で、年刊物と不定期刊行物は図書扱いとして掲載しました。NDCによる分類順排列は必ずしも知られていないことを考慮して分類項目表を掲げることで主題検索への道も図りました。和漢書に著者索引、洋書に書名索引を付さなかったのは、一に制約条件によるが、伝統的な検索方法として和漢書の書名、洋書の著者の所在検索の利用が高いと判断した結果です。書名索引で分出した書名の範囲は利用者がその図書を記憶していると思われる書名に止め、著者索引は本文に掲載した大部分の著者名を分出しました。問題点として、主題検索を充実するため分類重出を増加すること、索引から本文への案内は頁付より個別化された文献番号を付すこと、索引類の強加、書誌的事項の充実等々が考えられ、これらを漸次改善してゆくことが今後の課題であると思います。

この目録の刊行そのものに対し、また編集内容について、批判や要望を図書館へお寄せ下さい。私達はそれらを今後の課題として受けとめ、努力と工夫によって目録をより良いものに作り上げていきたいと思っています。

（整理係）

じょうほう じょうほう じょうほう じょうほう  
日本書誌の書誌 総載編 天野敬太郎編 巖南堂書店 昭和48 この総載編は、全体に通ずるもの（一般書誌）を収録してある、各個主題のものは主題編として刊行予定です。

## 静岡師範学校等関係資料目録

- 万国地誌略 師範学校編 明治8  
 下等小学日本地誌略 2冊 磯部物外編  
 静岡師範学校蔵版 明治10  
 静岡県誌 平山陳平編  
 静岡師範学校蔵版 明治10  
 小学書牘 磯部物外著 加藤信一郎書  
 静岡師範学校 明治11  
 「志づはたの友」静岡女子師範学校同窓会誌  
 第1号 明治39  
 静岡県方言辞典 静岡県師範学校・静岡県女子  
 師範学校編 吉見書店 明治43  
 ※ 〃 〃 編 赤春堂 昭和30  
 静岡県碑文集 静岡師範学校 大正1  
 教育研究録 静岡県師範学校附属小学校学級経  
 営法研究会 大正4  
 郷土誌教授細目 女子師範学校附属小学校  
 大正4  
 名勝勝地静岡県 県立師範学校 大正10  
 〔静岡師範〕学校卒業年次調 静岡県編  
 〔大正10〕  
 児童創作集 創刊 静岡師範附属小学校内児童  
 創作研究社 大正10  
 ※和漢洋貴重書目 静岡県師範学校刊 大正13  
 創立50年記念〔静岡師範学校〕同窓会会員名簿  
 静岡師範学校同窓会 大正14  
 〔静岡女子〕師範学校卒業年次調 静岡県編  
 〔大正15〕  
 郷土教育の研究 第1—2 静岡県静岡師範学  
 校附属小学校編 谷島屋書店 昭和6—7  
 郷土教育講習会概要 浜松師範学校 昭和7  
 浜名湖の協同研究 浜松師範学校 昭和7  
 創立25周年記念誌 静岡県立女子師範学校  
 昭和8  
 静岡県郷土史写真集 静岡師範学校附属小学校  
 国史部編 谷島屋書店 〔昭和初期〕  
 静岡県郷土地理写真集 静岡師範学校附属小学  
 校編 谷島屋書店 〔昭和8〕  
 我等が郷土 浜松師範学校附属小学校  
 昭和9  
 静岡県伝説昔話集 静岡女子師範学校郷土研究  
 会編 谷島屋書店 昭和9  
 創立60周年記念誌 静岡師範学校同窓会有信学  
 昭和10

- ※概説静岡県史 静岡師範学校編 谷島屋書店  
 昭和10  
 郷土教育概要 改訂版 静岡女子師範学校編  
 昭和11

- ※静岡県郷土誌 静岡師範学校郷土研究室・日本  
 青年教育会共編 昭和14  
 静岡風景 一版画と文一 高木吉武著  
 静岡師範学校 昭和15

(※印は本館所蔵)

この目録は「静岡県印刷文化史」「県立中央図  
 書館郷土資料目録」「静岡県教育史」等を参考に  
 して作成しました。

- 静岡県師範養上下等小学校則教則 明9年8月8日  
 静岡師範学校則 9.10.10  
 師範学科ノ初等中等高等ノ区分ニツキ 15. 1.16  
 雲外「聞廢初等師範学科有感」 15.10.15  
 教員定着ノタメ公費ニヨル師範学校  
 生徒ノ応募勧誘ニツキ 16. 2.23  
 静岡県尋常師範学校規則 20.12.24  
 大庭実「静岡師範学校教授法筆記」(抄) 32. 1  
 実業教育ノ振興ニツイテ大島多計比古  
 静岡師範学校校長談話 32. 6. 9  
 師範学校長学事視察規程 34.11.15  
 静岡県師範学校男子私費生志願者心得  
 書送付ニツキ 36. 1.21  
 静岡県女子師範学校規則 39. 3.30  
 静岡県師範学校則 41. 2.10  
 静岡師範学校卒業記念教案、尋三・四  
 読方 大 2. 6. 4  
 静師附小学年研究会開催につき 3.12. 1  
 静師附小研録(抄)校長内堀維文「序」  
 「児童に自らなきしむべき仕事の研究」  
 「児童の学習態度に関する研究」 4. 2. 4  
 静岡師範学校教生 尋三・四年女子  
 綴方教案 7. 9.26  
 浜師附小「理科教材の系統」 7.11  
 静師附小「昭和教育としての郷土教育」昭 7. 5  
 女師附小主事杉本勇三「国民精神文化  
 研究所を了へて」 9.12.26  
 (以上は静岡県教育史資料篇より作成)  
 静岡師範学校・静岡女子師範学校・浜松師範学  
 校は昭和20年の戦災等で焼失したため、当校の後  
 身である静大の図書館にはほとんどこれら資料を所  
 蔵していません。これ以外にも多くの資料があ  
 ると思われます。こころあたりの方、お教えくだ  
 さい。

(春山俊夫)

